

新約釈義
マタイの福音書 9章9節～13節

東海聖書神学塾
教職志願者コース・基礎科2年
野町 真理

イエスは、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイという人をご覧になって、「わたしについて来なさい。」と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った。

イエスが家で食事の席に着いておられるとき、見よ、取税人や罪人が大ぜい来て、イエスやその弟子たちといっしょに食卓に着いていた。

すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。

「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人といっしょに食事をするのですか。」

イエスはこれ聞いて言われた。

「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」
---新改訳聖書

1、はじめに

新約のキリスト教会がギリシャ語のテオス (θεος) という言葉で伝えようとしてきたものは、神からの啓示によって人格的に出会ったまことの神がどのようなお方であるかという神観 (神のイメージ) である。神という言葉聞いたときにどのような神のイメージを抱くか、これが福音を福音として受けとめ、まことの神に応答するために最も大切なことである。また、「神はどのような (状態の) 人間を愛し、招いて下さるのか」という質問は、神を理解するために最も大切な問いである。そのためにパリサイ人たちに向かって語られた「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」というイエスのことばの釈義を試みたいと願う。その際、「ハマルトローロス (罪人)」とはどのような人間を意味するのかについてのWORD STUDYを中心として釈義を試みる。

聖書や様々な文章を読む際に、文脈 (全体) を考慮せずに部分を読み、私的解釈をすることは避けなければならない。それと同様に、神学者の発言もその人の全人格 (生活) 的流れ、あるいは全生涯的流れの中で考察するようにしなければならない。なぜなら、どんな人の人生であっても、幾つかのターニングポイントがあり、そのことを通して大きくものの見方や考え方が変わっていくはずだからである。また人間は失敗を犯すことを避けられない存在であるから、あらを探して裁くようなことはするべきではない。しかしそれにもかかわらず、その発言がもし聖書の真理から大きくずれていて、福音が福音でなくなるような場合には痛みを持ってそれを指摘するべきだと私は思う。このことを考慮しながら、内村鑑三の「罪人」に関する解釈についても少し触れたいと思う。

2, Greek Text of sentence flow

9:9 Και παραγων Ο Ιησους εκειθεν ειδεν ανθρωπον
καθημενον επι το τελωνιον,
Μαθθαιον λεγομενον,
και
λεγει αυτω ακολοωθει μοι.

Και αναστας ηκολουθησεν αυτω.

9:10 Και εγενετο αυτον ανακειμενου
εν τη οικια,

και ιδου πολλοι τελωναι
και
αμαρτωλοι
ειθοντες συνανεκειντο τω Ιησου
και
τοις μαθηταισ αυτου.

9:11 και ιδοντες οι Φαρισαιοι ελεγον τοις μαθηταισ αυτου

δια τι μετα των τελωνων
και
αμαρτωλων
εσθιει ο διδασκαλος υμων;

9:12 ο δε ακουσασ ειπεν

ου χρειαν εχουσιν οι ισχυοντες ιατρου
αλλ οι κακωσ εχοντες.

9:13 πορευθεντες δε μαθετε τι εστιν

ελεος θελω
και
ου θυσιαν
ου γαρ ηλθον καλεσαι δικαιουσ
αλλα
αμαρτωλους.

3、ハマルトローロス（罪人）についてのWORD STUDY

・新聖書辞典（いのちのことば社）の「罪」の項（河野勇一師執筆）より

新約聖書で罪と訳されている語とその類義語は多い。ハマルティアの動詞、ハマルタノーはもともと「的をはずす」あるいは「迷う」「誤る」を意味する一般的な語であったが、70人訳においてヘブル語のハッターのギリシャ語訳として用いられたことにより、専ら「罪を犯す」という聖書特有の意味を表す語となった。名詞のハマルティアも、70人訳においては通常ヘブル語ハッターズの訳語として、ハマルテマと共に使われ、これらは新約においてもおもに複数形をとり、具体的な罪の行為や律法違反を意味する（マコ1：5、ヨハ8：24、使2：38、ヤコ1：15、Iヨハ1：9、3：4）。

また、行為だけでなく、人間の持っている神に敵対する性質をも意味して用いられている（ヨハ8：34、9：41、15：22、ロマ3：20、Iヨハ1：8）。さらにパウロは、ローマ5～8章において人に住みつき力を振う悪しき原理として、罪を人格化して語っている（ロマ5：12、6：12、14、7：17、20、8：2）。

・” The New International Dictionary of New Testament Theology Vol.3
(Editor:Colin Brown)” のSIN（ハマルティア）の項より

罪人（ハマルトローロス）とは、伝統的なユダヤ人の見解によると、律法とパリサイ人の律法の解釈を守らない人を指す。従ってそのような人は取税人と同類であると見なされ（Matt. 9:10 par. Mk.2:15 f.）、異邦人や神を知らない者と同様に見られた（Matt. 26:45; Mk. 14:41; Lk. 6:32 ff.; cf. Matt. 5:46 f.）。マルコ8：38にある” 罪と姦淫の時代” という組み合わせは、罪は人を神から引き離すということの意味する。それ故に悔い改めと赦しが必要である。

山上の説教などに見られるイエスの説教はユダヤ人の罪の概念を超えたものであった。彼は律法を急進的にし、彼の到来と彼の人格を新しい基準とした。イエスが罪人と共に食事をすることによって新しい状況が明るみに出された。それはイエスが来たのは罪人のためであり、正しい者のためではないということである（Matt. 9:13 par. Mk. 2:17; Lk. 5:32）。彼は” 貧しい者は幸いである” と宣言し、” 重荷を負った者” を彼のもとに招いた。それは「罪人の友」と呼ばれる彼の使命と関連している（Matt. 9:10 f.; 11:19）。彼の罪人たちとの交わりはルカの物語の中に顕著に見られる（Lk. 7:36 ff.; 15:1 ff.; 18:9 ff.; 19:1 ff.）。ルカ15:11-32の失われた息子の物語は、罪深い息子も正しい息子と同じように父の財産を必要とすることを示す。マタイ23:1-36、マルコ12:37-40、ルカ20:45以下に見られるイエスのパリサイ人に対する応対は以下のことを特に明らかにする。すなわち、ユダヤ教に関する限りでは、イエスが来られることによって、正しいことと罪を区別するための基準が完全に改められたということである。ユダヤ人の合法的な基準による正しさは計算された正しさであった。そしてその正しさは彼らのひとりよがりやイエスの拒絶のために神の前において特に罪深いものとして暴かれた。

受難の物語において、特に最後の晩餐において、イエスの全生涯と説教は十字架の眺望からはっきりと見られる (Matt. 26:28)。イエスはあがないの犠牲の意味を御自身の命の犠牲と取り替えた。ここにおいて正しい者と正しくない者とが同様に罪人として見られる。この洞察はルカ 5 : 8 におけるペテロの叫び (" 私から離れて下さい、私は罪深い人間ですから、主よ。 ") において予見される。そしてそれは福音書著者たちの総合的なイエスの使命の解釈の中に要約されている (Matt. 1:21 ; Lk. 1:77)。従ってバプテスマのヨハネによって悔い改めの見地から解釈されたバプテスマ (Mk. 1:4 par. Matt. 3:2, Lk. 3:3) が新しい意味を持つ。バプテスマと罪の赦しとは共に使徒たちによってイエスの死と復活の中に基礎づけられた (Jn. 20:23; Acts 2:38; 5:31; 10:43)。

・ 内村鑑三の解釈の遷移

岩波版 内村鑑三全集 第12巻436頁

第13巻190-191頁 より

罪人とは、主観的悪人であり、主観的悪人である。

罪人とは、自己を罪深き者と思い、悔い改めて、神にその罪を赦された者のことである。こういうわけだから、罪人は敬すべき者、尊敬すべき者であるが、悪人は恕すべからざる (赦すべからざる) 者である。

こういうわけだから、キリストが罪人の友であるというのは、悪人の友であるということではない、キリストは悪人の友ではない。人は悪を成してキリストの敵となるのである。

したがってこの罪人は、事実神の敵となった者ではなくて、この虚偽の世の人が罪人と称するのに過ぎぬ。キリストが罪人の友であるというのは、こういう罪人の友であるという意味である。

内村鑑三のこの時の罪人とは愛されるにふさわしい罪人である。

明治40年7月

「聖書之研究」89号

「所感」において「罪の人」というタイトルで書かれた文章の中から

汝等悪者なるにとキリストは人類全体に就ていひ給へり (マタイ7章11節)、人は善に不足するにあらず、全然善を欠くなり、彼は悪者 (あしきもの) なり、神に善者とせらるるまでは少しも善ならざる者なり。

基督教は此事を教ゆ、聖書は万人を罪の下にとちこめたり (ガラテヤ3章22節)、…キリストは我等をより善き善人となさんがために世に降り給ひしにあらず、悪者を善者となさんがために贖罪の血を流し給ひしなり。

・パウロの理解

罪人＝神の敵

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対する御自身の愛を明らかにしておられます。

…もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。

ローマ5：8－10

・アウグスティヌス

「罪とはいかにしても赦さるべからざるもののことである」

・M. ルター

神は「偽りの罪人」を救い給うのではなく、「真実の罪人」を救い給うのである。

4、「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」の解釈について

・内村鑑三の解釈 1922（大正11）年12月キリスト伝研究（ガリラヤの道）より

之に答えてイエスはいい給うた「すこやかなる者は医者^をを要せずただ病ある者之をもとむ」と。是は風刺であって同時に教訓である。汝等パリサイの教師等は健康者である。故に我を要せず、税吏マタイは病人である、故に我をもとむとの意である。ただし是は確かにアイロニー（反語）である。本当の病人は是等の宗教家であって、比較的健全なるはマタイとその同僚とであった。…そしてもし是等の「俯仰天地に恥じず」という自称君子がイエスに向かって「我は果たして医者^をを要せざるすこやかなる者であるや」と問うならば、彼は答えていい給うであらう「汝はすこやかなりと言ふが故に病人である。汝等の罪はのこれり」と（ヨハネ9：41参考）。

・” Calvin’s New Testament Commentaries --- A Harmony of the Gospels Matthew, Mark and Luke Vol.1 (translated by A. W. Morrison)” より

これはユダヤ律法学者の偽善とプライドを反駁するために語られたことばであるが、普遍的で最も有益な教訓を含んでいる。私たちは以下のことを告げられる。すなわち、キリストの恵みは私たちが私たち自身の罪を自覚し、彼のもとにへりくだって行き、罪の重荷にあえぐ時にだけ私たちにとって有益であるということである (the grace of Christ is only of benefit to us when we are conscious of our own sins, and come to Him in humility, groaning under their weight.)。キリストが彼の天の栄光から降りて下さったのは彼らを招くためであった故にキリストが罪人をやがて拒まれるという恐れがそこにはないために、さらにまた、弱い良心が堅い厚顔へと形作られる。同時に、私たちは”悔い改めさせるために”という句を固守しなければならない。それは赦しが私たちのために成し遂げられたのは私たちの罪を助長するためではなく、聖さと聖化の中に生きることを願望することを蘇生するためであったことを告げる。

5、釈義

9:13 πορευθεντες	δε	μαθετε	τι	εστιν,
going	But	learn ye	what	it is.
VRAONMYP	CC	VM2AA-YP	APTNN-S	VIPA-ZS

Ἔλεος	Θελω	και	ου	θυσιαν
Mercy	I desire	and	not	sacrifice;
N-AN-S	VIPA-XS	CC	AB	N-AF-S

ου	γαρ	ηλθον	καλεσαι	δικαιους	αλλα	<u>αμαρτωλους.</u>
not	for	I came	to call	righteous [people]	but	sinners.
AB	CS	VI2AA-XS	VNAA	AP-AM-P	CH	AP-AM-P

6、まとめ

スウェーデンの神学者A. Nygren (1890-1978) はその著書” Agape and Eros” において、「偽りの恩寵」をエロースとし、「真実の恩寵」をアガペーとして福音の性格を明確にしている。彼によれば、キリスト教における愛がもっとも明確になるのは、神が罪人を愛したもうという事実においてである。しかし神が義人を招かずして罪人を招き給うのは、罪人が義人よりも実質的にさらに善き者であるからではない。神の愛はそれを受ける人間の側には全然依拠せず、ひたすら神御自身にのみその根拠をもつ。「したがって神が愛したもう人間は、いかなる程度までその神の愛に値するかという問いは全く地に墜ちる。」

イエスは自分では「正しい人」だと自認し、自分の病気に気がついていない者たち、自分の罪を知らず、悲しんでもいない律法学者、パリサイ人たちをも招こうとして彼らに皮肉を用いて語られた。眠れる良心を呼び起こすために皮肉は度々有効であるからである。そしてイエスはまさにすべての人の眠れる良心を呼び起こすために来られた。それはカルヴァンが注解するように、キリストの恵みは私たちが私たち自身の罪を自覚し、彼のもとにへりくだって行き、罪の重荷にあえぐ時にだけ私たちにとって有益であるからである。

イエスの誕生の預言として「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です (マタイ 1:21)。」と記されているマタイの福音書には、著者マタイの証しが織り込まれている。彼は、かつて取税所に座っていたときにイエスが目を留めて下さったこと、そしてイエスの「わたしについて来なさい。」という招きに応えて従いはじめたことが彼の人生を変えた出会いであったことを喜びをもって、かつ砕かれた魂を持って記している。ルカやマルコが記しているように、彼は自分の家にイエスとその弟子たち、そして仲間であった取税人や罪人たちを招いて大ぶるまいをした (マルコ 2:14-17、ルカ 5:27-32)。その席でマタイは「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」というイ

エスのことばを聞きつつ、その恵みを心から感謝していたに違いないと思う。それはマタイ10：3で、12弟子の1人に選ばれた彼が、他の共観福音書の著者たちとは違って、自分の名前を”取税人マタイ”と記していることからもうかがえる。マタイという名前は”主の賜物”という意味を持つ。彼はイエスとの出会いを通して変えられ、名前のおり、主の賜物のような存在として生かされたのではないかと思う。